2010 ワールドカップ南アフリカ大会のゲーム分析
―ゴールに至った攻撃パターンの分析―
The game analysis of 2010 FIFA World Cup South Africa
-Analysis of attacking patterns leading to the goal-

1K07B151-6　　西川大輔

指導教員　主査 堀野博幸 先生　　副査 広瀬統一 先生

【目的】

本研究では，2010 ワールドカップ南アフリカ大会の得点シーンを分析することによって，現在のトップレベルのサッカーの得点時における現象分析を行い，そこから導き出される現在のトップレベルのサッカーにおいてゴールを奪うための有効な攻撃について検討することを目的とした．

【方法】

1．研究対象

2010 ワールドカップ南アフリカ大会の全 64 試合で生まれた全 145 ゴールを研究対象とした．

2．分析手続き

DART FISH Team Pro（ダートフィッシュ・ジャパン）を利用し，日本国内で TV 放送された 2010 ワールドカップ南アフリカ大会の VTR から全ゴールシーンを抽出し，ボール奪取からゴールまでの過程の 12 項目についてそれぞれ分析を行った．

3．分析項目

ボール奪取からゴールまでの過程に関わる要素として，12 項目を設定し，分析を行った．

【結果】

今大会ではセットプレーからのゴール比率が低くなり，オープンプレーからのゴール比率が高くなっていた．攻撃開始地点については中央，特に自陣側から得点につながる攻撃が開始されていることが示された．ボール奪取直後のプレーとしてはショートパスが 74%と圧倒的に多く，またゴールにつながる攻撃の開始方向に関しては，前方への進路が多く，ゴールを第一に目指した攻撃への切り替えが得点につながっていることが示された．ボールを獲得してから 3 本以内のパスでゴールに至った割合が 44%と，圧倒的に多いことが示された．ゴールに至った局面においての最後のプレーの 44%がショートパスであり，ラストプレーの方向としては前，中央を合わせると 92%であることから，ゴールにつながる攻撃においてはゴール直前のプレーはゴール方向に向かって行われていることが多いことが示された．ラストパスが出されたエリアはアタッキングサードに集中していることが示された．シュートを放った地点は全得点がペナルティエリア内を含む，アタッキングサード内からのシュートであるということがわかった．また，1 タッチでのゴールが半数以上の 56%であることがわかった．攻撃方向とパスの本数について有意差が認められた．（$F(3,98)=2.728, p<.05$）　そこで Scheffe を用いた多重比較を行った結果，前（1 群）と後（4 群）の間に 10%水準で有意な傾向がみられた．

【考察】

守備が高度に組織化され「レスタイム，レススペース」と言われるように，現代サッカーにおいて，守備が高度に組織化されていることが本研究においても確認され，少ないパスの本数や少ない時間で攻め上がることの重要性や，守から攻への切り替え時に前方へ進路をとることの重要性が示唆された．今後オープンプレー，セットプレーともにさらなる守備組織の向上を仮定すると，その中で組織化された守備組織を打ち破ってゴールを奪って行くために，オープンプレーにおいてはスピードの上がった状態で，それもプレッシャーのかかった中でテクニックのバラエティーや高いテクニックのクオリティーを発揮すること．セットプレーにおいては意外性を生み出すことが必要となっていくと推察される．攻撃側はまずは相手の守備が整う前にダイレクトプレーを狙い，それができなかった場合に，ポゼッションプレーを状況に合わせて使い分けることがゴールを奪うために有効な攻撃手段であると推察された．